

地 理 学 の 目 途

——文化地理学からの再構成——

渡 辺 欣 雄

I 序にかえて——十年ののちに——

本稿は、筆者が書きしたためておいた『文化地理学の理論構造』と題する、およそ二百枚あまりの草稿の一部を載せたものである¹⁾。昭和43年12月25日にこの旧稿が脱稿するまで、幾度となく、類種の課題に関する草稿を書きしたためたのであるが、いかんせん専攻分野のちがいがから、適宜な掲載誌をみいだすことができず、それら草稿は、書庫に山積みのままであった。それからのち、今日にいたってもなお、筆者の地理学研究は凍結したままであり、また放棄もしていたのである。したがって本稿は十年後に蘇生した亡霊のようなものではあるが、今回ここに蘇生させてみたのはほかでもない、現在、本学にあって専攻こそ筆者のものではないが、ある事情²⁾により「生態学」を講じていることによっている。筆者は大学時代、地理学を副専攻としてもっていたこともあって、そこで今回の「生態学」の講義に際しては、多く地理学の知識を援用せざるをえなかったからである。

しかしながら、生態学と地理学とは、当然のことながら、起源や研究目的・方法など全般にわたり、およそジャンルのことなる領域である。かたや Ernst H. Haeckel の *Ökologie* を、かたや Alexander von Humboldt の *Geographie* を想起するだけでも、生物科学と地球科学との相違にも似るのである。

相ことなる領野を容易に合致させたもの、それは Julian H. Steward が興した《文化生態学》 *Cultural Ecology* の内容であった。ことにわが国の地理学、とりわけ文化地理学 *Cultural Geography* を学ぶ者にとって、Julian H. Steward の文化生態学は、近年におけるひとつの大きな目標であった。筆者の旧稿『文化地理学の理論構造』も、かれの文化生態学理論を援用し、あるいは通過しつつ地理学の *Urheimat* への回帰を果そうとしたものであった。

本稿は、その大部分、文化的唯物論 *Cultural Materialism* を基盤とした文化地理学から、従来の地理学の諸理論を吟味し、批判的再構成を試みたものである。地誌論といい、地域論とい

い、景観論といい、あるいは環境論といい、分布論といい、地理学は今日まで、地理学の本質論や方法論を幾重にも重層させて唱えてきたが、わすれていたのは“人間”に関する分析であった。他学への遠慮もあってか、地理学者の多くは、“人間”そのものを研究するのは他学のものであるといい、他学の成果を借用して、みずからは自然と人間の、地域と人間の、あるいは人間をふくめた全地球的現象の断片を究めるに急であった。しかし、このような他科学との協同の神話は、本質への追求を欠いた《科学的テクニック》を助長したのみであった。

人間が第一級の地理的因子であるならば、人間およびその生活様式としての文化を、地理学者が究めてはならないというテーゼはどこにもない。そこに他学があるならば、他学にたちいて、それらを究め、地理学に応用することを否定するテーゼは、地理学にはどこにもない。

筆者がかつてはたちいろうとし、現在、そこにいるのは、文化人類学である。しかし本稿は、文化人類学から地理学を語る、というよりもむしろ、文化地理学として地理学をみようとするものである。そこには現今の地理学に対する、少なくとも積極的な意味での批判がふくまれているし、「これこそ地理学ではなかったか」という本質論がふくまれている。したがって、いささか古くさい議論ではあるが、「地理学とは何か」をまず問うし、過去の業績に対する再解釈もふくまれている。そのような議論を経由することによって、まずは文化的唯物論の立場にある文化地理学に至ろうとするのである。

しかし、文化地理学のゆく末は、文化的唯物論から視るアプローチの限界をこえて、地理学そのものの原郷にも復するような認識地理学 Cognitive Geography なるものに到達することになるであろうと思う。

地理学は、現象を科学の名において、あまりにも客観視しすぎてきた。それはそれなりの立脚点が今日まで得られたのであるが、人間の認識は《科学》ばかりではないし、客観的世界がすべての世界なのではない。本稿では、認識地理学は、ひとつの提案でしかないが、やがては地理学の本質論にもかかわるであろうような、きわだった変革的議論を、その内容に抱きたいと思っている。認識地理学の目的は、“生活者の主観世界としての Geographia” にたちもどる、いな、たちなおることだからである。その成果としては、本稿と前後するが、すでに発表したものをもつ (1971, 1973, 1978)。

さて、本稿は、「地理学の性質について」の一般的な議論を経由せねばならない。本稿が十年前のものであれば、いささかその新鮮さを欠くのであるが、現今の地理学も、以下の議論を経由することなしにはありえないであろうと思いつつ、議論を展開する次第である。

II 地理学の性質について

地理学が Alexander von Humboldt を経て Paul Vidal de la Blache に至るまでの歩みのなかで、《近代化》し、《現代化》してきたことは、多くの地理学書が説くところである。そしてさらに、現代に通ずる理論を説いた学者として、一様に掲げるのが、まずはドイツの A. Hettner であろう。A. Hettner は、1859~1941の人物であり、かれの業績はまた20世紀前半のものであ

る。なかでもとりわけ『地理学,その歴史,本質および方法』*Die Geographie, Ihre Geschichte, Ihre Wesen, und Ihre Methoden*(1927)と題する書物は、従来の粗雑な地誌的課題を、そして二元化されていた“地理学”をひとつに統一する意味で地誌学とし、それを地理学研究の目的にすえたことは、今日よく知られている。すなわち、A. Hettner にいたって、自然地理学と人文地理学とが、統一された地理学としての目的その他を回復した、といわれている (cf. 野間三郎 1967 : 36~40)。それでは、A. Hettner の主張する地理学の対象・方法・目的および課題というのは、いったいどのようなものなのか。それを要約列記すれば、つぎのようなものであろう。

1. 地理学は、たしかにその性質上二元性を有するものであるが、しかしこれは、“地誌”という観点にたって統一されるべきものである。
2. “地誌”という観点は、経験科学における事物的・時間的・空間的区分では、空間的科学として、その位置を与えられるものである。
3. 地理学の対象たる地域＝地表の研究は、部分空間の相違を、因果の追求という立場からとらえるところになりたつ。
4. 人文地理学において、人間の研究が人類学や民族学や社会学ともことなるのは、それが部分空間や景観を構成するものとしてあるかぎり、自然条件と人間の行動のあいだの相互作用を通じてとらえることにある。
5. 地域は物的充填の空間であり、それは景観 *Landschaft* として把握されるものである。
6. 地表の文化景観の諸形態は、人間が環境にはたらきかけた結果であり、そこには人間と環境との相関がみられる。

地理学とは、A. Hettner の主張によれば、空間科学であり、自然と人間との相互作用を通じてあらわれた地域的現象の総体＝景観を把握することにある。なるほど地域や景観という部分空間が、自然と人間の営為の渾然一体となった現象であってみれば、その総体を把握するためには、自然地理学および人文地理学の二元性を設定しなすむかにみえる。それを果たすものは、かれのいう“地誌学”であるわけだが、しかし果してその実際はどうであろうか。A. Hettner の主張には、細部にわたって疑問がのこる。

ある地域の現象を項目を追いつつ羅列記載する“地誌”は、あるいは可能であるかもしれない。しかしそれを“地誌学”として、個性的な記述の域にまで統一的説明をえようとするには、その地域の具体をはなれた、かなりの抽象が必要である。かつまた地域の現象は実際には、有機的連関をはたすほどの合理性を有するものではない。くわえて、地的統一そのものをみきわめようとする閉鎖的思考には、それそのものもっている論理上の欠陥がある。Carl O. Sauer が示唆するように (1965 : 351-379)、自然領域と文化領域が一致することは、実際にはほとんどありえず、地的単元としての同質性はほとんどえられないからである。しかもまた今日にみるよう

に、有効な地理学研究は、少なくとも自然・人文の領野において系統だてられた視点をそれぞれもっている系統地理学 Systematic Geography である。視点はたえず研究者の意図・目標を包含しているのである。

第二に、地誌研究としての地理学が、空間科学であるというには、それなりの前提が必要である。すなわち synchronic な視点は dyachronic な、あるいは panchronic な視点を前提としてはじめて可能だということである。ことに科学というヨーロッパ的思考をもととするのであれば、なおさらのことである。したがって、共時的な視点に通時的・汎時的課題をも内包しなくてはならない。

第三に、A. Hettner は、部分空間 Teilräume という用語をもちいて地域や領域、あるいは大陸などの意味をあらわそうとする。地球表面の一部としての、人類の一部としての地人相関の部分図がそれである。しかし部分は全体あつての部分であり、部分を部分として位置づけるには、全体空間の研究が第一義的発言権を有する。その発言権を有するのはおそらく地理学ではなからう。

第四に、かれがかんがえる人間の研究は、あくまでも自然条件を考慮してのちに対象とされるものであり、自然条件を考慮せず、しかも部分空間を構成しない人間の営為は、地理学の対象とはならないわけである。このように、対象を限定すること自体に異議はないが、それは自然条件の熟慮と、人間生活の詳細な研究があつてはじめていたる対象設定であり、筆者の知る人間生活の研究からみて、地理学のこの種の研究は、ともすれば未熟な研究に終始しがちである。地理学は人類学の人間研究と同等の研究をもって自然条件との相関研究にいたるべきなのである。

第五に、A. Hettner がしめした、物的充填の空間という概念は、非常に物理的・機械的である。景観の概念は、植物でいう群落、動物の群れ、人間生活の集落をあらわすものであるが、動物・植物はつゆ知らず、少なくとも人間生活のうえでの景観的単位としての集落は、人間生活の領域をしめす村落とは一致しない (cf. 石川栄吉 1967: 397-398)。社会的单元である村落とは一致しない、単に家屋のよりあつまりとしての集落を、自然条件とのかねあいのうえでのべたところで、人間をふくめた部分空間は、およそ描写できるものではない。

そして第六に、6にしめした課題もまた多くの疑念の余地をのこしている。文化景観の形態は、あくまでも文化の所産である。文化は人間によって発明され、伝播し、継承されてゆくものであり、人間が環境にはたらきかけて形成され、あるいは維持されるものがすべてではないし、そうかんがえないほうが文化の本質にせまる研究をすることが可能である。人間はいちぢるしく環境に対しては選択的である。人間はたしかに環境に対して適応しようとする。しかしその適応の方法や度合はまちまちであり、環境条件の類似がおしなべて人間の適応方法や度合を同じくするわけではなく、したがって文化景観も多元的側面からことなってくるわけである。

以上にもみるように、A. Hettner の地理学では現代的な課題に耐えうるような視点を呈示することはできないし、不十分きわまるものがある。

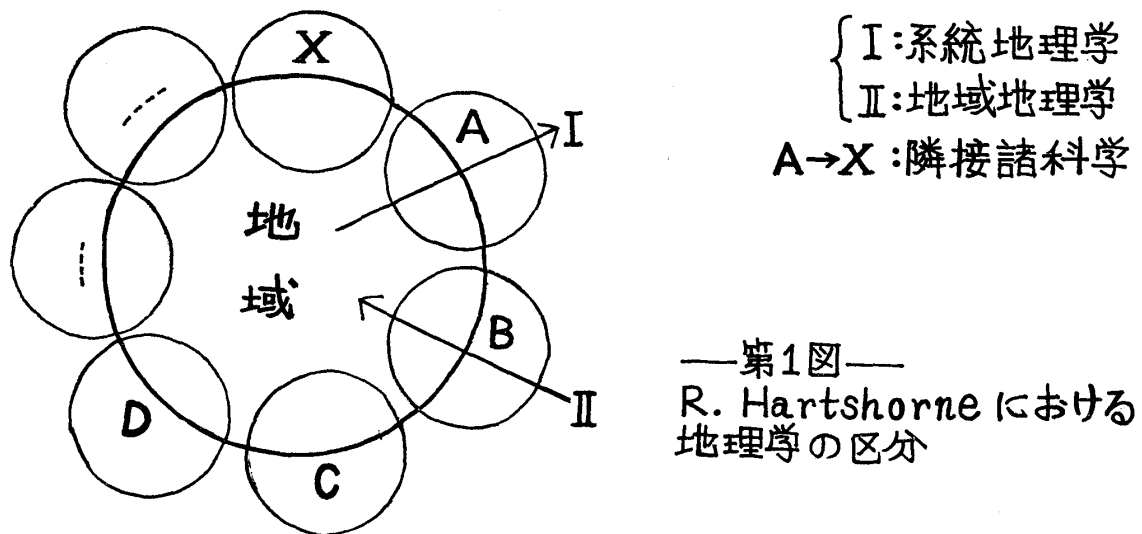
A. Hettner の主張に対し、まれにもみる地理学の体系化をなしたのが、アメリカの R. Hart-

shorne であり、A. Hettner の地理学を継承・発展させた学者である。それをかれの代表作である『地理学の性質』*The Nature of Geography* (1939) [野村正七訳 1957:各所] にみることにする。かれは地理学の性質について、以下のように規定している。

1. 地理学は、自然科学、社会科学の両者に根をくだし、両科学の特徴を兼備している。
2. 地理学は、厳密な現象集団を関心としてもちあわせてはいないが、空間部分＝地域で相互にことなつた現象が、どのように統合されているかを研究する機能をもっている。
3. 地理学は、実在のありのままを研究するものである。
4. 地理学は、確実性・厳密性・普遍性・系統性という理念に、どれくらいかなっているかという見地から、その性格が検定される。
5. 地理学は、一般概念を確実に系統化し、相互関係についての一般法則を確立することによって、その知識の普遍性をもとめる。しかし地理学の大部分は、必然的に特異性の研究を問題にする。
6. 系統地理学とは、一般概念や一般的原理を発展させるものであり、地域地理学は地域の一般的概念をみいだすものであるが、これは理論的には不可能である。
7. 地理学の知識は、ふたつのことなつた方式で系統化される。それは自然地理学と人文地理学であり、それはさらに系統地理学・地域地理学から系統化される。
8. 系統地理学と地域地理学とは、相互に依存しあつた、ふたつの研究方法である。
9. 地理学は、コログラフィー的の学問として、諸学に伍するものである。
10. 地理学は歴史学と対応し、歴史学とは総合科学である点で似たものをもっている。しかしながら、両者を対等に統合させることは、人間の能力を超えたものである。
11. 地理学は相関現象の地域的表現を描きあらわした地図に、科学的テクニックを求めている。
12. 地理学の理念は、現象間の関係原理によってとらえられる。
13. 地理学における世界区分の課題は、世界を論理的に分割しながら、同質的單元にまでくだつてゆくことにある。
14. 系統地理学は、現象の地域的差異がどのように他の現象の差異と関係しているのかを研究するが、地域地理学は、個々の地域的單元における、すべての相関形式の地域的差異についての知識を組織づけ、それによって個々の地域單元を、全地域表面の大小区分のシステムにあてはめる研究をおこなうものである。

羅列的ではあるが R. Hartshorne の地理学理論の骨子をぬき出してみた。R. Hartshorne は、A. Hettner の説明不足をよく補ない、ここにみるかぎり、少なくとも R. Hartshorne が A. Hettner から影響をうけたと思われる主張は、1. 2. 6. 7. 8. 9. 10. 12. 13. 14. にみうけられる。

R. Hartshorne にしたがえば、地理学は二元的に自然科学と社会科学の特徴を兼備している学問である。すなわち地理学は、自然地理学と人文地理学とをあわせもつ学問である。しかし、両地理学は、二元的に分離したままで存在するのではなく、系統地理学／地域地理学という両地理学のカテゴリーのなかに包摂され、統合されるものである。系統地理学とは、かれによれば、現象の地域的差違を問題とし、地域地理学とは、個々の地域内の要素間の相関原理をあきらかにするものであって、一方はまず現象を、他方はまず地域を問題とする地理学の自然／人文の両野を分たぬ方法論である。このように統合化された地理学は、地表上の空間部分において、相互にことなつた現象がどのように統合されているのかを、同質の単元にまで下降させて研究対象を設定し、それを地図化し、描きあらわすという科学的テクニックをもつ科学である。このような意味において地理学は、コログラフィカルな〔地誌的な〕科学として、歴史学と対応・対置する。そして地理学は、実在を記述するため、現象を地域的単元においてとらえ一般法則をもとめるが、多くの地理学は法則の普遍性よりも特異性を描出する成果をあげるものである。このような地理学研究は、最後に、确实性・厳密性・普遍性・系統性という科学的理念にどれくらいかなっているのか、という検定が必要となってくる。第1図は、R. Hartshorne の地理学理念の中心



である系統地理学と地域地理学の分別を図示したものである。A. Hettner の唱える“地誌学”は、R. Hartshorne の用語では“地域地理学”となる。

R. Hartshorne は、A. Hettner の地理学の継承者であると、各地理学書は解説するが、こと地誌学＝地域地理学に関して、R. Hartshorne はむしろ否定的／消極的である。その点筆者も賛意をあらわしておきたい。西川治が主張するように、「地表上の部分空間の境界は、現実には截然とした形で与えられているものではないので、境界をもつ地域として画定するためには、一定の目的・観点・方法が必要である」(1967:66)ということである〔傍点筆者〕。一定の目的・観点・方法を導入すれば地域を策定することができるが、複数の目的・観点・方法をもって、諸現象の相関の場としての地域を描く地誌学には、研究の前提に、もはやすでに“地域”をみうしなう要素がふくまれているからである。地域を描くことができるのは系統地理学の方であり、地域

地理学ではない。

しかしながら、R. Hartshorne の提唱する地理学にも多くの疑問がのこる。地理学がコログラフィカルな観点をもつことで諸学に伍するとはいえ、その地誌的観点は、研究の当初においてその研究目的がみごとにうちくだかれることは、すでにのべたごとくである。くわえて地理学は、歴史学と対置されるような存在にはないのである。A. Hettner の主張においてもおなじであるが、地理学はとくに synchronic な観点をもつということで、dyachronic な視点を強調する歴史学とかれは対置させるが、地理学は自然と人間との相剋を描き、またことさら地域における現象を追おうとする。この観点は、たとえ地理学が synchronic な視点をもっていることをみとめたにしても、その内容はかなりせまく、問題が限定され、しかもまた、現象の地図化に科学的技法をもとめすぎているのである。synchronic な現象というものは、かならずしも地人相関の構図のなかに生起するものではない。また、現象が、地域という、幾段階にも地表現象を分類することのできるような枠組にはまるともかぎらないし、また逆に、幾種にも地域分類されることもある。いづれも現象は地域に固定しないのである。そして、現象の地図化という形式的で非実質的な幾何学模様の中に現象をあえて固定する手続きをとってしまう。地図には実在が描かれるのではない。研究者側の記号が描かれるのであり、それは研究者のモデルにすぎない。したがって、実在の側からこれをみれば、R. Hartshorne の検定規準のことごとくは、現象を図化することで、理念とはかけはなれた恣意性を挿入することになる。地理学者のいう現象とは、車窓のながめのように客観視された、現象それ自体とのコミュニケーションのない兆候にすぎない。これが自然現象であれば、研究は、車窓としての計器にたよらざるをえないが、人間の生活であってみれば、19世紀当時の旅行家や観察者のように、車窓の観察のような研究は、研究者の公理を少しも脱脚することのできない偏見にみちたものとなるであろう。このような事実はすでに、19世紀の地理学者 F. Boas の警句とするところであった(1911:142)。くわえて歴史学が果して dyachronic な視点をもった学問の代表であるかどうか、地理学が学問分野を分かって両立すべき伴侶であるかどうかともまた疑わしい。そもそも歴史学は、文書・碑文その他の過去の史料なくしてはありえない。それはすなわち無文字社会の学ではない。人類史の99%をうめつくした狩猟採集民の歴史は、歴史学のおよばぬところである。これらの一連の疑問に対しては R. Hartshorne の地理学では、いかなる意味でも解答不能である。この問題は、現今の地理学では解答できぬと断言してよいかもしれぬ。地理学の理念が《地を這う虫》のごとくであってみれば、なおさらのことである。

さてこれまで、ドイツ・アメリカの地理学的内容の代表と目されるものを評したが、フランス地理学ではどうであろうか。近年の地理学者として、フランス地理学を代表するのは A. Cholley である。A. Cholley は、フランスの伝統的な地理学的傾向のひとつである《歴史地理学》的傾向に反対し、むしろ、P.V. Blache 以来の生活様式 genre de vie 論を地域複合論の観点から強調し、のちに賛否両論を惹起させた人物である (cf. 谷岡武雄 1960:207-208)。地理学の対象

と方法が最も簡潔に示されている、と R. Hartshorne もみとめた〔山本・正井・田中 訳編 1967：(2)〕といわれるかれの主張を、つぎに、山本正三・正井泰夫・田中真吉の訳編になるところの『地理学の方法論的考察』（1948—1951）にみることにしたい。例のごとく、A. Cholley の主張を要約列記すると以下のごとくになる。

1. 地理的事象は、つねに多種類の因子・要素の複合体・集合体としてあらわれる。地理学は、この複合体内部の作用・役割を分析すること、その結果を把握することを目的とする。

2. 地理的複合体が出現するのは、物理的因子と生物的因子と人文的因子との集合体の出現のときである。

3. 複合体は、二種類の研究対象となることができる。すなわち、複合体の発生や状態の分析、他方は、複合体の結果として、地表面分化の要因をさぐることである。

4. 人間は第一級の地理的因子であり、したがって、地理的人間の分析、すなわち物質的側面と、それに付加された精神的側面の両者を分析しなければならない。

5. 地域概念は、機構化の原理をふくんでいる。地表空間の機構化の達成には、人類性概念に到達せねばならない。

6. 人文地域の形成に重要なものは、イデオロギー、人口、自然的因子、自然的条件である。

7. 地域地理学の究明は、地表空間諸因子の作用の具体的なすがたであり、一般地理学のそれは、諸因子の構造のなかで、諸因子の相関状態において、一般概念を把握することである。

8. 地理学は、政治的イデオロギーに犯されず、あくまでも実験の正当な評価を基礎とせねばならない。

9. 歴史学と地理学とは、時間・空間の対象の相違があるが、歴史学は、時間においても地表との関係を究明しなかったため、正確には対応しない。

10. 地理学の独創性は、地球科学に人間をひき入れたことであり、人間と自然との相関関係を明白にしたことである。

A. Cholley にとって、地域は物理的・生物的・人文的因子からなる複合体 complex であり、しかもなおそこにおける“第一級の地理的因子”は“人間”である。したがって地理学は人間のもつ物質的側面＝形質人類学的側面と、精神的側面＝文化人類学的側面とを分析せねばならない。第一級の地理的因子の究明が、このような点にあるわけであるから、結局、地表空間の機構化達成には、人類性 humanité の概念域にまで地理学研究を昇華しなくてはならないというわけである。

A. Cholley は、地域構成の要素として、人文的因子以上に物理的・生物的因子の存在を強調するかと思えば、人文的因子が地域の構成にとって、ひじょうなウェイトをもっていることをもみのがしてはいない。筆者はこの点を重視してみたのである。

さらに A. Cholley の地理学理論の特徴をかながえてみると、やはりかれの地理学もまた、《地域構造論》の系統にあることがわかる。地理的事象は、諸因子・諸要素の複合体・集合体である、地理学の研究目的は、この複合体内部の作用・役割を分析することにある、というかれの論拠は、P. George らの《地域間関係論》や、J. Labasse らの「capital を与えているのは地域ではなく、地域をつくりだしているのが capital である」（青木伸好 1968：32）というような主要因子地域形成論とはおよそちがっている。地域間関係論か地域構造論か、はいつでも議論の余地があるものであるが、A. Cholley の立論は、後者にあると筆者は判断するし、これは決して地誌学的博物学ではなく、有効な地理学の体系論であると思う。

ただし、P.V. Blache 以来のフランス地理学の伝統である、人間重視の観点を、さらに一歩すすめて、それではいったい“人間”というものが、人間という因子がどのような全体像をもったものであるのかをきわめることは、けっして地理学的観点に不必要なものではないと筆者はかんがえるのである。それは、生活様式論を発展させて、人類文化論の域にまで理論的水準を高めることである。人類文化論の水準にあれば、物理的・生物的・人文的などというあいまいな因子分析で終わることもなければ、物質的・精神的などという人間像の19世紀的表現を披瀝しなくてもすむであろうし、さらに、6に掲げたような、イデオロギー、人口、自然的因子・条件といったような人文地域における誤まりの多い要素分析もせずすむであろう。

P.V. Blache の系統をひくフランス地理学にあつては、このように人間のもつ生活様式=文化の分析に興味をもってとりくんでいることがわかる。しかし残念なことには生活様式概念を、あくまでも自然環境とのかかわりあいにおいてのみ分析する傾向をもっていることが、地理学者のなかにはあつて、環境論 Environmentalism からいまだに脱脚しきれぬ難点をのこすのである。であるからといって、地域間関係論者たちが主張するように、「自然をあくまで第一前提とはかんがえず、農業生産に結びつくかぎりの自然」（青木伸好 1968：32）として、自然環境をとらえよ、と筆者は主張しているのではない。自然環境をかながえようとする際に必要な視点とは、あくまでも主体の側からとらえられる自然であり、それはすなわち文化から、あるいはまた生活者からみた自然である。自然はたんに農業生産にのみ在存するものではない。狩猟採集者にとっての自然、耨耕農業者者にとっての、犁耕農業者にとっての、園耕農業者にとっての、牧畜生活者にとっての自然があり、さらに非生産的次元における生活環境としての自然が存在するのである。環境を重視するにせよ、軽視するにせよ、いずれも文化や生活者の内容の理解が必要なのである。筆者の場合、主たる主張は、文化人類学が行なってきたような文化や生活者の世界の内容分析をすべきだということなのであるが、文化人類学といわず、M. Sorre や、P. George らのように、社会学との提携のなかで人間をみる、ということであってもよい。地理学は他学の知識を援用することなしに、地理学の内容を維持することはできない、ということは、すでに第1図が示している。さて、地理学の性質に関し、以上の三者を中心としてのべてみたが、現今の地理学はさらに精緻化された議論が沸騰していることであろう。しかしながら、地理学の本質論

を研究者の問題として、視点として論ずるときに、筆者にとって、最新の議論はもはや不必要である。どのような新しい地理学の理論であれ、この三者の議論を経由することなしに、新しさをもとめることはできないからである。F. Ratzel, P. V. Blache の地理学を経由せずして、現代地理学への端緒が切りひらかれなかったとおなじように……。

ここで、以上の論述に得られた研究者＝地理学者の地理学観と、筆者の見解を要約してみることにはしたい。

地理学の研究対象

地理学は、地球表面の部分空間としての地域を研究対象とする。地域には大小さまざまなレベルが存在するが、A. Cholley の“複合体”の概念からすれば、地域はたんに同質的な地域であるよりも、むしろいろいろな因子が作用しあって形成される機能空間としての地域である。くわえて、R. Hartshorne が唱えるように、地理学が諸因子の関係原理をきわめる学問である以上、単一指標による地域の把握は、地理学方法論の正統を踏むものではない。しかし、研究対象としての地域の実際は、R. Hartshorne が主張したような実在そのものではなく、地理学が実在把握のために用いようとする概念である。したがって地域は、西川治のいうように、一定の目的・観点・方法をもって、研究者側の意図のなかで描かれる。また、地域の把握をおこなう、ということは、それが地理学の研究対象であるから、という理由はうなづけるとしても、依然としてそこには、地理学固有の対象であるという必然的理由は存在しない。他学との関連をことさら必要とする地理学であってみれば、研究対象としての地域は、他学と共有せざるをえない対象である。

地理学の研究方法

これにはいろいろな方法がある。第一に、地理学には、自然環境と人間生活との関係原理を究明する環境論的把握の方法がある。第二に、地理学には、地域の比較を通して一般概念の証明をおこなう、という系統地理学的方法論がある。第三に、地理学には、地域そのものの相関現象を把握するという、地域地理学ないしは地誌学に立脚点をもとめる方法論がある。第四に、地理学には、景観という生活様式の統一体を、いろいろな条件分析を通じて解析するという景観論的把握方法がある。第五に、いままでのべてはこなかったが、ひとつの事象ないしは複数の事象の地表面上の分布状態を知ることによって、事象の地域的特性を把握しようとする、分布論的把握の方法が、地理学には存在する。

このようにいろいろな方法論が、少なくとも地理学的方法論として、あるいは極端な主張のなかには、地理学固有の方法論として、存在することを、多くの地理学書は評明している。なかでも一般に共通している主張は、地理学固有の方法とは、事象の図的表現、すなわち地図化の科学的テクニックである、ということである。

しかし、この図的表現の方法を地理学的方法のもととしない学者もあることを覚えておきたい。そのひとり、石田竜次郎は、「野外調査こそ地理学独特の調査〔方法〕である」（1965：46—48）と断じ、図的地域表現の技法を地理学独特のものであるとはしない。くわえて石田は、「すべての条件が同一と仮定して、と前置きする態度は、地理学には存在しない。〔地理学の研究方法は〕一般の馬ではなく、黒馬や白馬がなぜことになっているのか、周囲の多数の条件を分析して、黒馬・白馬の存在を究明するところにある」（1965：46—48）と唱えるのである。野外調査は、たしかに地理学を生むきっかけとなってきた。A. von Humboldt の南米における長期の調査はみごとなものであったし、その後の多くの地理学者は、野外調査をこころがけてきている。しかしながら、野外調査は過去にも現在にも、地理学独特の方法ではなかったのである。また、石田がたとえていうところの黒馬・白馬の議論も、それは学問の個性記述的な側面であって、逆に地理学にも法則定立的な一般概念の探究のあったことは、すでに A. Hettner, R. Hartshorne の主張にみえている。地理学者がたえず問題としてきた《地域》とは何か、という問いかけは、全地球的同一性を仮定せずして、どうして描写できるであろうか。地理学方法論としてよく登場する地域論・地誌論・景観論・環境論・分布論はみな、個性記述的・法則定立的な具体と抽象の方法論を兼備した理論であるはずである。

地理学の研究目的

地理学の研究目的は、A. Hettner にしたがえば、自然と人間との相互作用を通じてあらわれた地域的現象の総体＝景観を把握することであり、R. Hartshorne にしたがえば、地理学の研究目的は、空間部分＝地域で相互にことなった現象が、どのように統合されているかを研究することであり、A. Cholley にしたがえば、地理学の研究目的は、地域に集約された諸因子・諸要素の複合体内部の作用・役割を分析すること、その結果を把握することにある。わが国で著名な地理学者たちの言明も、おおよそ以上の三者のような内容を目的視している。

地理学は、ふたつ以上の地域性の闡明、すなわち理論的説明をする学である（田中啓爾）。

地理学は、地球空間における文化現象の地的束縛性をきわめる学問である（佐藤弘）。

地理学は、地球上の事物・現象に関する記載の学である（石田竜次郎）。

地理学は、地表をひとつの生命ある有機体として認識しようとする学問である（三野与吉）。

地理学は、地域差をとらえ、それぞれの地域性をあきらかにする科学とか、地域構造を具体的に把握し究明する学とかいわれる（木内信蔵）。

（堀口友一編 1964：14—15）

ヨーロッパ・アメリカおよび日本の著名な地理学者たちの地理学における研究目的を総観すると、おおよそそれは“地域性” locality の把握を目的とした学として、地理学をみとめていることがわかる。自然と人間との相関分析を通じてでもよい。現象表現の場としての部分空間の分析を通じてでもよい。諸因子・諸要素の相互作用の複合体分析を通じてでもよい。要するに目的は

《地域性の闡明》にある。しかしそこには、地域性とはいったい“何の地域性であるのか”といった疑問がたえずのこる。これに対して地理学には、無限の解答がえられるはずである。現象の総体だからである。そこにじつは地理学の弱点がある。地理学は必ず具体を経由する。総体と称して研究を終えるわけにはいかない。現象の何かを取捨選択せねば研究は進展しない。このような研究の選択や意図をどこにもとめるのか、それによって、地域性の概念もまたちがってくるはずである。

以上が地理学の内容であり性質である。もとより筆者にとって、このような地理学は満足のゆく地理学ではない。第一級の地理的因子をみうしない、あくまでも車窓の景観分析にとどまろうとする地理学には、納得のゆくものではない。筆者の立場は、第一級の地理的因子そのものからまず究める立場にある。それは文化の分析であり、生活者の世界の分析である。環境は、何にとつての環境であろうか、地域は、何にとつての地域であろうか、現象は、どのような実在に根ざした現象であろうか。重要な人文的因子にとつてみれば、環境は適応の対象でありまた、認識の対象である。地域は文化的に統合された、ある構造のひろがりでありまた、意味の充填された空間である。現象とは文化的実在に根ざしたものでありまた、生活者の経験的主観に根ざしたものである。なべて筆者の地理学観は、従来 of 科学的地理学とは異なりをみせる。文化地理学、それはいまに始まったものではない。現代地理学が創始された時点で、もはや始まっていたのである。そこで、筆者は今度は文化地理学として、ここに学史を再度、瞥見してみようと思う。

III 文化地理学的再評価

文化地理学の先見的業績として、再評価されねばならないのは、現代地理学の祖ともいわれてきた、F. Ratzel がまずあげられるであろう。F. Ratzel といえば、地理学史のなかでは、とりわけ《環境決定論》Environmental Determinism の代表者として、銘うたれてきた人物である。《環境決定論》などという、Hippocrates や Montesquieu らの思想を想起させるが、かれらに共通した発想は、自然環境が人間生活に与える影響のプライム・ムーヴァーである、ということにある。しかしはたして、F. Ratzel の地理学的主張が、《環境決定論》という安易なレッテルによってあらわされるものかどうか。生物学者であり、民族学者であり、かつまた地理学者であった F. Ratzel の幅ひろい知見は、民族学者 A. Bastian や、生物学者 M. Wagner らの影響をうけて発展したものであり (cf. 石川栄吉 1965: 14—15)、F. Ratzel の意図した人類史の構想は、たんに《環境決定論》という低平な次元にとどまるものではない。F. Ratzel の業績は、19世紀後期の史的=文化的諸研究にむけての、地理学的研究の趨勢のひとつなのである。

Friedrich Ratzel の文化地理学

F. Ratzel の『人類地理学』*Anthropogeographie* (1882, 1891) の学説の中心におかれた思想は、永遠に運動してやまない人類と、相対的に固定している大地との相関関係にある。生物学

的アナロジーによってなりたつかれの論拠は、《生命は運動なり》という公式のなかにある。

「生命とは、与えられた特定の形式のうちに、つねにくりかえし復帰するところの運動である。生命とは、外的刺激によって生ぜしめられるところの内部的運動の総和である。……このような生命は、まず第一に、有機体の内部的事実である。しかしながら、内部的生命は、つねに外部的運動を生じなければならない。有機的物質の増加・成長・繁殖などはいずれもみな空間運動を意味している。……植物が分岐すること、珊瑚が分派すること、これは空間的拡張にほかならない。かくしてもなお、空間的支配は、一般的な生活現象であり、生命の象徴である」（国松久弥 1931：88—126）。

地球上に生命をもつものはみな、運動能力をもっている。増加し、成長し、繁殖する。内部的細胞分裂における力が外部形態に作用し、かくして分布的拡大をうむ。人間の生命もかくして運動するわけであるが、その運動を阻止するかのごとく、地的束縛 *Erdgebundenheit* が与えられる。人間の活動が、地表面上にある以上、文化がいかに進歩しようとも、この地的束縛は消滅しない。文化の進歩によって変化するのは、土地と人間との結びつきである。

「各民族は、その基礎と環境とを構成するところの自然から、ますます解放されてゆくものである、と主張する者があるならば、この主張はたしかに誤れる見解である。……英国の、独国の、ベルギーの全文化は、数百年前よりも今日の方がはるかに多く、これらの国土の自然を構成してきた石炭と鉄とに依存しているものであり、その限りにおいてこれらの国の文化は、従来ほとんど存在して [いなかった] ひとつの新しい紐帯によって、その土地に結びつけられているのである」（国松久弥 1931：88—126）。

地的束縛性は、民族の文化が向上したとしても、決してなくなるものではないし、かえってあたらしい紐帯によって、土地に結びつけられてしまう。それは生命の運動が必然とするところの移動の法則に、ふかく準拠しているからである。

「生物はあたかも水のごとくに重力の法則に、奴隷的にしたがうことなくして、かえってその全体においては、地球のはるかに深い場所にまで入って行こうとする衝動をもっている。渡り鳥の軌道は、つねに一定の峠とか、谷間のうちに存し、またこれよりも明らかではないが、他の放浪する動植物の路もそうである。民族の生活も同じ傾向をしめすものである。もちろん土地の隆起は歴史的運動を永久に阻止はしないであろう。……これに加えて、我が中央独逸山脈がはじめて鉄道によって横断された時代においてすらも、この影響は作用せしめられていたのである」（国松久弥 1931：88—126）。

生命は運動する。しかもその運動は一定の規則をもっている。そして規則のある運動には自然的制約がともなう。それは動植物たると人類たるとを問わない。したがって、生命の運動にはたえず地的束縛がついてまわる。

「自由な空間のところでは、民族はあたかも液体のように広い面へ氾濫し、障碍が立ち現われるまで非常に広く流動する。この障碍が現われるところでは、運動は分裂し、谷間であろうと森林の隙間であろうと、あるいは、かつてやってきた人々の旧住地であろうと、最少抵抗の方向へ進入する。運動が障碍によって妨げられた場合には、運動はさしあたり外へ向けての努力を休止する」（石川栄吉 1965：15）。

F. Ratzel の地理学の立脚点、それは果して《環境決定論》なのであろうか。生物の生命現象を生物学的に解釈し、生命の運動を力学的に解釈し、そして人類生活にもあてはめてみるという観方は、あたかも文化を無機界や有機界の現象と同等の所産としてみることであり、この点はもとより誤まった見解である。しかしながら、F. Ratzel の主たる関心が、運動と地的束縛性のみかかわるものであったなら、かれの業績を今日に伝える意味は、なにもなかったに相違ない。F. Ratzel の独創的な点は、運動論を文明化のプロセスや文化の伝播にあてているところにある。

「世界の歴史が、地球全域にわたる文明の拡張を示すものであるなら、文明民族のうちに存する自然の数のうえでの優越は、なかでも重要な要素である。よりはやく増大をとげた人びとは、その余剰物を他に流出させ、そのようにして迅速な増殖の因子や条件である高文化の影響力を、自然のうちに優勢にさせに。このようにして、すなわち人類の目的であり任務であり、願望であり要求であるところの人類の統一を、より完全に実現するために、つねに努力しながら、文明の拡張は、ひとつの自律促進的な発展として、文明化しつつある諸民族の世界に、ひろくたちあられるのである」（Ratzel 1896—1898(1)：13）。

F. Ratzel の意図した研究は、A. Bastian が構想を描いていたところの“文明化の過程”と同種の人類の営為をきわめることであった。地理的にそれぞれの地域で生じた民族的観念 *Völkergedanken* が、それぞれ独立に自成発展して、地域的制約から解放され、人類の共通した精神共同体である基本的観念 *Elementargedanken* に帰一するという A. Bastian の観点は、F. Ratzel にあっては、文明のもつ優越的な影響力、すなわち経済や人口の増大をささえる技術の進歩が、世界各地に拡張していくという構想に代わる。地理学的条件である位置 *Lage* や空間 *Raum* その他は、文明勢力の伝播に条件・制約を与え、他民族との接触をみちびくものである。それを証明しようとしたのが、F. Ratzel の弓の分布・伝播の研究その他であり、その研究を通

じて地理的領域と文化とのクロノジカルな関係を描いてみせたのである。

さて、このような F. Ratzel の研究は、当時の科学界においていかなる位置をしめるものであったのだろうか。野間三郎はつぎのように位置づける。すなわち、「18世紀以後における生物学の著しい進歩は社会科学や一般に人文諸科学に大きな影響を与えることにな[り]、コントやスペンサーは社会を有機体としてとらえ、人間とその社会の発展を環境に対する『適応』の進歩としてこれを考察しようとする試みをはじめた。ラッツェルの仕事はこれらと一連のものとして考えることができるし、それをさらに科学的にし、地理学的立場において考えるものであったといえる」(1967:25)、としている。

19世紀の科学界は、C. Darwin の『種の起源』*On the Origin of the Species* (1859) の進化学説に魅了された感があった。それが直接間接に社会学者 Spencer らの社会進化論にも影響を与え、また、K. Marx らの史的唯物論にも、L.H. Morgan や、E.B. Tylor らの文化人類学者らにも、そして地理学にあつては O. Peschel らの進化主義的地形学や、R. Richthofen らのそれにも問題開発の余地を与えてきた。したがってこのような思潮にあつた科学界での、F. Ratzel の思想にもそれらの影響がなかったとはいえない。しかしながら、F. Ratzel の理論的背景を、進化主義の傾向にもとめるのは誤解を招きやすい。F. Ratzel の発想は A. Bastian らの文化史的なドイツの思潮に影響をうけたことの方が多く、かれの発想は、進化主義のもちいる形態の発展にこそとをとおいてはいるが、形態の発展を地表面上の文化要素の[・]地[・]域[・]的[・]な[・]ひろ[・]がり[・]や、[・]民[・]族[・]の[・]移[・]動[・]の[・]点[・]から説明したのであつて、地域的特性を無視し、未開野蛮から文明への発展の一元的公準をもとめてやまなかつた進化主義に基本をおいたのではないからである。F. Ratzel は文化の分布的=地域的特性をみつめて、文化史を復原したのであり、そのような意味で、文化進化論を批判して文化圏説を唱えた Leo Frobenius への強大な影響があつたのである。

地理学のなかでいえば、F. Ratzel と同じように歴史的な観点をもちあわせていたのは P.V. Blache であつたことは周知のとおりであるが、P.V. Blache の意味するような歴史とは、歴史のとらえかたがちがっていたところに、P.V. Blache による F. Ratzel への批判がある。したがって、両者の見解の相違は、たんなる《環境決定論》と《環境可能論》の相違ではなく、民族や人類の歴史や進化のとらえかたのちがいであつて、狭少な環境認識のちがいに帰せられるべきものではない。進化主義との対応でかんがえれば、むしろ P.V. Blache のほうが、はるかに進化主義的な発想をもっていたのではないかと、筆者には思われるのである。

このような F. Ratzel の理論は、たしかに生物学的なアナロジーによってなりたつ機械的=物理的《運動論》であつた。水が高きところから低きところへと流れていくように、F. Ratzel にとって、人類文化も、地的束縛をうけながら、高きところから低きところへと伝播するものであつた。この運動論が、民族学のなかで修正されて、やがて世界的な文化伝播主義を形成したことを思うと、地理学は F. Ratzel のもたらした偉大な遺産を継承しそこなつたような気がしてならないのである。

かれが現代の人文地理学の基礎をきづいた人物であることは、地理学史上にかならずかれの名が載ることでもあきらかなようである。かれは F. Ratzel の地理学を批判的に継承し、《環境決定論》にかわる《環境可能論》 Environmental Possibilism を形成したといわれる。環境可能論とは、環境が人類の生活のために用意された可能な条件にすぎないといungskんがえかたで、人類の能動的な適応過程に、その論拠をもとめるものである。

しかし、P.V. Blache の主張をかんがえるにあたってはまず、かれの歴史学者としての側面をみうしなくてはならない。E.E. Evans-Pritchard の言にしたがえば、P.V. Blache らの一連のブラーシュ学派の学者たちは、社会現象を歴史学的に解釈した一派であるとしていることでも理解できよう（1961：9）。《環境可能論》というさきの用語をいいかえれば、特定の文化の諸様式の起源を、環境にもとめるのではなく、歴史的伝統にもとめようとするような《歴史主義》である、と称してもよいのである。

しかしながらさらに、文化地理学的側面を P.V. Blache の遺稿『人文地理学原理』*Principes de Géographie Humaine* (1922) にもとめる最大の意義は、かれの《生活様式論》が、文化地理学として追求すべき《文化概念》の考究にとって、大きな意味をもつからである。

「人間は諸々の生活様式 *genre de vie* を創造した。外囲の自然のなかから採った材料や要素の力を借りて、かれはみずからの保存を保証し、環境をかれの用に役立たしめる何らかの方法なるものを、……さまざまのやりかたや発明を、相継ぎ相伝えることによって構成することに成功した。……そしてまた、ここから諸々の集団の間にあらたな分化の原理がはいりこんでくる。何となれば、生活様式なるものは、これが包含する食制や諸慣習によって、今度は人類の姿をつくりかえ捏ねあげるところの原因として作用するからである」（Blache 1922：（訳）46—60）。

P.V. Blache の生活様式論のなかには、文化に対する基本的な理解が織りこまれている。生活様式とは、人間がそれのとりまく環境のなかから獲得し、それを相続相伝してゆく歴史的伝統において後代に伝え、環境利用に役たしめる全体である。それだけではない。人類が環境から獲得した生活様式は、今度は人類の生活が分化していく原因を構成する要素ともなるのである。ここに、F. Ratzel とはちがった、P.V. Blache の人間の能動的立場、環境に対する主体的な立場をみとめる部分がある。がさらに、F. Ratzel との観点のちがいをみるならば、むしろ人類史に対する観方のちがいのなかに、より判然としたかたちでみることができのではなからうか。

「従来の考察の対象とされる範囲は、有史時代を一步も出ていなかった。すなわち人類のドラマの最終の幕、地上に人類が存在し活動した時間に較べて、ほんの一時にしかあたらぬ部分に限られていた。〔しかし〕人類は、われわれが考えていたよりもはるかに古く、かつはるかに普遍

的に、生物界にはたらきかけていた。……人類がかように早くから世界各地に普及していたという事実からして、人類がしたがわねばならなかった適応現象の事例は、はなはだ多岐にわたるといふ結果が生じてくる」(Blache 1922: (訳) 46—46)。

P.V. Blache がこのように唱えるとき、人類の歴史を文明史にかぎることのない壮大な時間規模をみとめることができるであろうし、なおかつ、環境への適応を異にする民族の歴史を想起することができるであろう。この視点にはおそらく、文化地理学がとらえねばならない、多系的な時間系列をもととするような、とらえかたがひそんでいることであろう。Blache は、さらにつづけてこうもいっている。

「従来の諸見解の淵源となっている地域的局限性を超越して、地と人との普遍的諸関係があらわれてくる。……大陸の伸びひろがっているうえに此処彼処に散在していた諸集団は、かれらの間をへだてる自然的障害物、山塊、森林、沼沢、水涸れた地域、等々のごときものに妨げられていて、ようやくこれを超克しえたのは永い年代を経てのちのことであった。約言すれば、文明とはこれらの障害物に対する闘争につきる」(Blache 1922: (訳) 236—239)。

F. Ratzel にあっては、自然環境の障害物は、文明の流れをさししめす道しるべであった。人間は、そして文化はこの障害物にさからうことなく流水のごとく運動するものであった。しかし P.V. Blache にあっては、自然環境はいづれは人間によって超克されるべきものであり、文明にとっての闘争の相手であった。すなわち「生存のための闘争」(Darwin) ならぬ「土地との闘争」なのである。このような人間の自然に対する超克は、まさに人間の歴史的所産である。しかしながら、P.V. Blache が主張する自然との闘争は、人間世界から自然を排除していくような闘争なのではない。むしろ自然現象を人間のためにいかに利用していくか、という自然との調和に闘争の目的がもとめられる。

「人類の変革作用は、たんに無機的な媒介者を利用してのみ営まれるものではない。人類は、手にした鋤をもって、亜土壌の分解した物質を利用することや、水の落下、土地の起伏の差によって増大された重力を作用することなどで満足しているのではなくて、環境の諸条件にしたがって、相集まり相结合している生物的なエネルギーのすべてと協働している。かれは自然現象の運転中に参加しているのである」(Blache 1922: (訳) 236—239)。

人類の歴史は、自然との闘争にある。しかし、無機的自然との闘争に人類は終始するのではなく、有機的自然との協働のなかで、生活様式を形成してきたというのである。人類は有機的自然と結合することによって、自然現象の運転中に参加する。このようなかれの観点は、あきらかに

生態学的な“共生”の概念の応用である。P.V. Blache の主張のはしばしにみえる生物学的アナロジーは、F. Ratzel のものとなることとはいえ、やはり当時の思潮の傾向を示したものである。

「植物地理学に欧州以外の植物界の分析によって供与されたものであることを、われわれが…指摘したような結果は、人文地理学が自然ととなりあわせの状態のままに生存している諸民族の認識によって、自然民族によって教えられたところに正しく匹敵する」(Blache 1922: (訳) 46—60)。

P.V. Blache の歴史的観点は、人間に主体的な立場を与えたことはすでにみたとおりであるが、おなじかれの生態学的観点は、人間が他の生物ときわだってことになった能力をもつものであることをかえってあいまいにしている。自然民族（これは F. Ratzel がつとめてきっていた用語であるが）の研究のなかで人文地理学的な課題をみとめた P.V. Blache は、その課題をつとめて植物地理学的成果と同等の線上におこうとする。それは、やはり F. Ratzel と同様に、有機界の法則をもって人類文化の法則を知ろうとすることであり、のちに掲げるような J.H. Steward らの批判を惹起するものでしかない。この生物学的アナロジーは、P.V. Blache がもつた生態学的な概念「生活型」life-form に帰因する生活様式論を想起すれば、文化論に近似するこの種の議論も、生物学の応用どまりであった、という批判は、さげられないようである。

かくして P.V. Blache は、人文地理学のもつものをつぎのように定めるのである。

「人類の地上における活動を研究し、何世紀にも何十世紀にもわたる占拠によって、すでに地表に刻みつけられた痕跡を研究してゆくことにおいて、人文地理学は二重の目的を追求してゆくことになる。人文地理学のなすべきことは、人力がそこに参与しているにしても、いないにしても、鮮新世の諸時代以来、巨大な動物数を減少せしめた破壊の明細表を書きあげるのみに止まるものではない。生物界の全体を統一している諸関係の認識を深めることによって、その内に進捗しつつある変革および予測の可能な変革を究明する手段をみいだしてゆくものである」(Blache 1922: (訳) 236—239)。

F. Ratzel は民族の移動や文化の伝播といった時間系列の問題を地理学に導入したが、P.V. Blache は、民族の歴史や文化の進化といった時間系列の問題を地理学に導入した。しかし、両者に共通した点は、やはり自然と文化に関する問題が主要な部分を占めていたことであり、両者とも有機的自然の法則を人文現象の説明に用いていたことである。文化は無機界・有機界から説明できるものではなく、それ自体が自律的な法則をもつ超有機体 superorganic であるという

A.L. Kroeber (1952: 49) の指摘に照らしあわせてみれば、かれらの説明の限界はおのずから知れたもの、ということができるであろう。

P.V. Blache 以後、フランス地理学が、その独特な方法論をもちいて学派を形成するまでに至ったのは、みな P.V. Blache の生態学的方法論、歴史的記述の観点、そして生活様式論に負うところが大きい。すなわち、今日、フランス地理学を称して“歴史地理学派”とか、“生態学派”とか、“社会学的地理学派”と称するのは、そうした傾向をさし示すものである。たとえば、筆者の知るかぎりでは、歴史地理学に L. Febure がいるし、生態地理学には M. Sorre がいるし、社会地理学には P. George がいる。こうした現象は、F. Ratzel の学風が、地理学のみの世界に関していえば、故国ドイツでひろまるよりは、むしろフランス、アメリカでひろまったことと大きな対象をみせるのである。

現在の地理学は、P.V. Blache が分析の対象とした、民族や歴史的過去の人類よりも、現代都市の人間の研究が盛んなようであるが、かといって P.V. Blache の歴史地理学が古いものであるとはいえない。「高度化した経済、社会の発展にともなって、『生活様式』の並置 juxtaposition は、複合した社会職業構造、さらに人間化された空間に席を譲り、景観のモザイクのうえに、物質の流れ、さまざまな関係生活の諸形態の重なった機能空間 l'espace fonctionnel と呼ばれるもの」（野沢秀樹 1967: 55）が現代の研究対象だとするような、E. Juillard が唱えるような、最近の傾向は、現代文明社会にあわせた概念であって、P.V. Blache の対象とする“生活様式”とは対象も視点もちがうのである。P.V. Blache の生活様式論をさらに発展深化させるか、それとも、その生活様式論を放棄するか、その岐路はまさに文化地理学的研究と、しからざるものとの岐路なのである。

Maximillian Sorre の文化地理学

かれは、P.V. Blache 以後、A. Hettner が地誌研究の方向に地理学を発展させたのに対し、生活様式論の再吟味の方向に地理学のあゆみを進め、人文地理学の人間生態学的内容を確立させた人物である。したがって、社会学にいう人間生態学／社会生態学、文化人類学にいう文化生態学、あるいは生物学の一部門としての生態学の概念とオーヴァー・ラップすることが多く、概念上の差異をどこにもうけるのか、のちに問題となってくる。しかしそれはともかくとして、M. Sorre は、人文地理学と周辺諸科学との交流のなかから、あらためて地理学をみつめなおそうとしており、筆者もまた、これに共鳴する多くの部分をもっている。ここでかれの主著『地理学と社会学の接点』Rencontre de la géographie et la sociologie (1957)、から、かれの主張するところのものをみてみよう。

「ある範囲に関する知識、それがなければ集団の存続も危くなるような知識が、いかに根の深いものであるかがよくわかる。これが地理学のささやかな発端である。ところがすぐにわかるよ

うに、社会学者もまたそこに研究対象をみいだすのである。結局、個人的に獲得した知識は、集団内で伝承されるからである。……L.H. Morgan も独自の立場から、イロクオイ族が何よりもまず、その居住する土地との関係によって位置づけられることを指摘している。イロクオイ族はまず丘の人、山地の住人、川岸の住人であった。このことについては社会学者のいろいろな考察材料となる点が多い。というのは、家族・氏族・部族などの社会集団が、それぞれの占める位置・地形・地域・空間の一片に、どの程度までみずからを関係づけて考えているのかを、社会学者は当然問題にしなければならないからである」(Sorre 1957: (訳) 4—38)。

M. Sorre はこのように、L.H. Morgan のイロクオイ族の研究を例として、地理学と社会学／文化人類学との共通する関心を指摘した。少なくとも人文地理学は、社会集団の形成する生活領域を研究する分野である。あるいは、その生活領域が自然と連関しあった地域の総体を研究する分野である、といってもよい。そこで、それでは一体、その生活領域を形成する主体が何であるのか、たとえば、それは、M. Sorre にとっては、部族などの生活の単位である。すなわち、部族などの生態を知らないでいて、地理学者は、およそ領域の問題を論ずることはできないというわけである。ところが、その問題は、社会学／文化人類学の主要な研究課題のうちであり、人文地理学もそこで、社会学／文化人類学の業績の多くを、導入せねばならなくなってくる。M. Sorre は、社会学者 É. Durkheim の社会形態学との関連において、その点を以下のように指摘する。

「É. Durkheim は、社会生活のあらわれが、それにとって基体 *substrat* となる単純な、あるいは複合的な、ある集団の所産であることを指摘する。……社会的基体の研究は、あきらかに社会学に属する。それはすぐにもとりかかるとのことができる対象である。それは社会的基体が感覚的にとらえられる物的形態をもっているからである。実際には社会構造は、人間と物との一定の組合せにおいて成立するのであって、必然的に空間的な諸関係をもっている。だが、社会的基体はまず外部形態とその内容によって定義される。社会的基体の外部形態とは、大きさ、位置、境界などであって、この点は F. Ratzel にしたがうのである。社会的基体の内容とは、その人口数および領域内の人口分布状態であって、われわれ地理学者が農村集落とか都市集落と呼ぶものである」(Sorre 1957: (訳) 4—38)。

M. Sorre は、社会的基体の概念を人文地理学の成果に照合してこうのべた。たしかに、社会的基体とは、Durkheim の概念としてよくとりあげられるように、社会の量や密度、すなわち人口の多寡・密度、都市農村における分布様式などをあらわす概念である。それはまさに感覚的にとらえることのできるものであり、また図的表現によって視覚に訴えることのできるようなものである。これは、人文現象を図的表現において語ろうとする地理学には、まさに格好の概念では

ある。しかしながら、そのような社会的基体が、社会集団を表徴するものであるとはいえないことは、図的表現＝景観の概念である集落と、社会集団の概念である村落とは一致しない、という前述の指摘によっていえることである (cf. 石川栄吉 1967)。したがって、M. Sorre がつぎにのべるような指摘は、その当初において、今日の議論とは、およそほど遠いものとなってくるはずである。

「社会学者は、諸自然科学から研究法を借用してくるが、自然科学においては、構造は機能とは無関係ではない。構造は機能をささえているが、機能はたえずみずからの要求のために構造を形成してゆく。〔したがって〕社会学では、社会生理学にはいる前に基体を記述せねばならない。しかし機能を理解したうえでなければ基体を完全に理解することはできない。……社会集団そのものの活動は、たえず外観にあらわれるのであって、人文地理学は社会集団の作用と生命をよく認識していないと、景観を理解することはできない」(Sorre 1957:(訳) 4—38)。

社会学者が自然科学に準拠していた1950年代までの議論の限界を知る今日、Sorre もまた自然科学的手法において、議論を展開していることは、仕方ないことであるかもしれぬ。しかし、それを度外視したとして考えるならば、社会集団の活動が、かならずや外観にあらわれるはずだ、という M. Sorre の期待は、あやまったものであるといわざるをえない。可視的實在に構造があるのではなく、構造とは一定の法則にしたがって原型を記号化し、翻訳されたものである。實在と構造との関係でいえば、實在に関係やパターンを似せることによって織りなされた記号の連関群を、われわれはみるのである。それは地理学者が好む、現象の図的表現の理念ではなかったか。したがって、社会集団の外観は、記号の連関群を通してみるのであり、社会集団の記号化に失敗すれば、社会集団の外観さえみうしなうことになるはずである。M. Sorre のいう外観とは、すなわち筆者のいう《モデル》である。さらにつけくわえておけば、景観は社会集団のモデルではないし、また基体と景観とは同等ではないということである。

しかしながら、M. Sorre の見解は、人文地理学と社会学／文化人類学の学際的交流の端緒をになういみにおいて、学史的にも貴重なものである。そしてそれはまた、M. Sorre の生活様式論や生態地理学を知るうえで重要な議論である。それでは、M. Sorre の唱える生活様式論とはどのようなものであるか、これを簡明に紹介している別技篤彦の紹介でみてみたい。

「M. Sorre は、技術の発展が古い生活様式を崩壊させ、変化させるという立場から、P.V. Blache の思想をさらに修正し、発展させている。人間が環境に働きかける技術の組合せが生活様式であるから、それは人間の環境に対する適応の積極的な形式である」(別技篤彦 1965:11—12)。そして M. Sorre は、生活様式を以下のように三つに区分する。

- 1) 生活様式の基礎をなすもの——農業であれば、作物の選択・農具・栽培法など。
- 2) 生活様式を維持固定させるか、または制限する作用をなすもの——社会組織や労働組織を

はじめ、住居・農業構造・経営形態・土地制度など。

3) 現実的効用のみとめられるもの、古い活動様式に関連をもつ習慣。

そして、M. Sorre は、生活様式の具体的表現を集落であるとし、それを農村・都市と農村の推移形態・都市および巨大都市に分けるのである (cf. 別技篤彦 1965: 11—12)。

生活様式の基盤を、技術にもとめている M. Sorre の見解は、その後の文化的唯物論からの文化地理学にも相通する内容をもっているといえる。ただし、生活様式のそれぞれの次元がいかんにして作用しあうのか、M. Sorre の議論のなかでは判然としていない。生活様式の基礎は、生活様式を固定するものを規定する一方、生活様式を固定するものは、基礎に対して制限をくわえるものなのだろうか。さらに、社会の媒体ともなるべき言語、社会の伝統を後代に伝えるべき言語などはいかに位置づけられるのであろうか。くわえて、社会規範をになうべき価値観や、生活様式の基礎を意味づける価値観はどう位置づけられるのであろうか。じつはそのような要素こそ、ある民族やあるコンテクストにおいては、生活様式をとらえるうえで重要である場合が多い。石田英一郎は、文化の構成要素として重要なファクターを四つほど掲げ、技術の文化をその基底にすえながら、なお、社会・言語・価値の文化にわたって、文化の内面を構成し、それぞれに規定しあう要素の相関図を掲げたが(1966: 52)、石田英一郎の図式から M. Sorre の生活様式論を判断すれば、技術や社会の要素に詳しい部面を看取できても、言語・価値にわたる、生活様式論にはおそらく欠かせないであろう主要な要素がぬけ落ちている部面を看してしまうのである。社会学の多くを援用したかれにあっても、やはり可視的实在のみをみようとすると、地理学の限界をみる思いである。よしんば、M. Sorre の可視的实在をみとめたとしても、可視的实在の内面を形成する不可視的实在は、可視的实在とは不可分の関係にあるものであり、つぎにみるようなかれの主張は、多くの地理学と同様に、みずからの地理学を不能の科学に追い落とす危険性をつねにはらんでいる、といわざるをえない。社会学に協力を仰ぐのであれば、社会学そのものをまず熟知せねばならない。それが地理学の宿命なのである。

「社会学は人間科学の領域内で、社会的基体を定義するために、他の学問もまたそれが研究している諸要素を利用するのだということ、またそれら要素の価値は、基体の構造を基礎にして決定されるのだということなどは、まったく当然のことである。だが、地理学は物事を地球との関連において考察するという特質に立脚し、総合的性格をもち、その記述のなかにさまざまな要素をとりいれている。人類集団は、それらの諸要素のなかで、大きな役割を果している。ところが人類集団の定義、構造などについては、地理学は社会学と研究をわけあう。全体社会内部における家族関係の本質とか力とかかを定義し測定することは、社会学者にゆだねられる。しかしそれらが経済形態とか集落に影響を与える場合には、地理学がもっぱら研究する。そして基体の形態を完全に記述したいと思うときには、今度は社会学者があらためてそれらの作用をとりあげる。……地理学者は生物学と歴史学の両方面にわたって訓練をうけているという点で、基体の物的諸要素の

研究にとりくむ準備がよりよくできているとってよいであろう」(Sorre 1957:(訳)4—38)。

地理学者は、社会学者との相違を、物的側面の研究における地理学の優越性を示すことで示そうとする。たしかに地理学は、地形・水系・気候・土壌・植生などの自然環境および経済形態・土地利用・集落形態・人口分布・交通形態・民族分布などの人間生活のいわば図的表現の可能な、可視的現象を解釈することに重点を置きながら、事象の空間構造なるものを研究してきた。したがって図的表現のしやすいもの、および図的表現で説明しやすい因子を抽出して、土地や社会の記載にあてていた。「土地に投影して、空間関係に置き換えられるものなら何でも対象として、地理学的研究が可能である」(清水馨八郎 1965:10)、といったような考えかたが、地理学の根底にあるためである。

これに反して社会学は、人間社会内部の不可視的諸問題をもあつかってきた。個人がよりあつまって形成する集団や組織、あるいは社会関係の問題、集団と経済機能の相関関係の問題、社会的秩序を担う階級や階層の問題、あるいは歴史的な社会の特徴を研究しようとする諸傾向の問題、あるいは地域社会の問題、また、文化人類学にも共通する家族や民族や国家や社会構造・宗教体系その他の社会的世界にかかわるいっさいの現象をあつかってきた。

さて、このように異なる研究の方向を、果して M. Sorre の提唱するように、分担して共同研究しあうことによって統一することができるかどうか、筆者には依然として疑問が残る。実践的見地からみても有効な方法は、地理学者が他学と類似する研究を分けあうのではなく、こと地理学にあっては、それよりもまず、他学者になってみることである。むだであるとはいわないが、社会学的成果と不一致になるような、経済形態や集落の研究が、地理学の独自性であってはならないはずであるし、物事を地球との関連でみるにしても、地球科学以上の成果を修めえない地理学研究には、独自の立場などというものは、およそ与えられないはずである。

さて、ここまで、あらためて文化地理学として、三人の学説を検討してきた。ひるがえって今度は、文字どおりの文化地理学的研究がなかったか、ということを開うてみると、“文化地理学”の名を冠した地理学は、かなり以前からあったようである。文化地理学の用語自体は、C. Ritter の時代から、ほぼ経済地理学と同義の内容で用いられており、その後にもさまざまな意味において用いられてきたようである。しかし、本稿で筆者が注目し、また注目したい文化地理学は、民族学や文化人類学と、あきらかに研究内容が類似しているか、研究を提携しうる文化地理学であり、古くは前述した F. Ratzel の“人類地理学”にそれをみたわけである。その後ドイツには、F. Ratzel の思想を発展させた学者として、O. Maull があらわれ、かれこそは、文化地理学 Kulturgeographie の用語を用いて、文化領域の問題についても言及した論文を残した人物であった。しかしながら、かれをふくめて、ドイツその他には、F. Jäger や K. Sapper らとともに、概して、文化景観 Kulturlandschaft 論の系統にある学者たち、がめだち本稿に載せるべき有力な指摘をしている著作がみあたらない。わが国における研究においても然りである。³⁾

探索の結果、筆者は、近年の成果として、文化人類学や先史学と提携し、比較的有力な文化地理学成果をあげている、C.O. Sauer の著作に遭遇したのである。

Carl Ortwin Sauer の文化地理学

かれは、歴史地理学者・経済地理学者であると同時に、文化地理学者である。かれもまたドイツの伝統的な地理学のように、景観論の系統をゆくものではあったが、かれにとって幸いしたのは、O. Schlüter のように、なかでも歴史的観点をみうしなわないところであった。そしてかれは、“人間”を強力に位置づけた研究を展開しているのである。

「地球表面を改変する最後の作用因子は、人間である。……なぜなら人間は、地球表面の侵食作用や増勾作用の条件を、いやましに改変してきたからである。……すべての地理学が自然地理学であるといったような感覚の下では、人間の作用する環境条件ではなく、人間そのものが地理学研究の直接の対象ではなかったがために、居住地、仕事場、田畑、コミュニケーションの経路による分野〔までも〕、〔地理学〕はフィジカルな表現を与えてきた。したがって、文化地理学は、地球表面を刻みつける人間の営為や、それに個性的な表現を与える人間の営為に、〔自然地理学とは逆に〕関連づけられるのである」（Sauer 1962：32—34）。

A. Cholley にみたごとく、人間は第一級の地理的因子であった。しかし、第一級の地理的因子であると人間をとらえるとき、それはやはり自然地理学と同様、人間を自然環境の一改変営力としかみないとらえかたに等しい。人間は、他の自然的作用因子とは相違して、独自の地域を形成し、独自の発展をとげる存在である。それは、自然科学的には解明することのできない何かをもっているからである。かくして、人間がつくりあげ、抱いているところの《文化》の研究がはじめられる。人間は、人間の営為の場としての文化領域をもつ、がゆえにこの文化領域の内容こそ、文化地理学もまた、文化人類学とともに研究せねばならぬ第一の対象なのである。

「人文地理学において、われわれは文化領域の内容に関心を抱いてきたが、……われわれの研究は、人類学者のものより単純な研究であった。……ほぼ一般的な研究といえば、自然領域から着手するものであるが、島嶼をのぞけば、自然領域を構成する内容を知ることは、……ほとんど不可能である。たとえ自然領域なるものをみとめるにしても、依然として、文化の単位は、自然の単位の境界線をまたぎやすいという事実と直面するのである。自然領域の中心よりむしろ境界が、文化領域の中心となりやすい。……ある秩序をもつ文化領域は、単一の経済複合の優越した状態によって認識されよう。すぐれた秩序をもつ文化領域は、一群の地域経済の相互依存により決定される。……経済の変動により、有機的に依存している文化全体の領域が形成される。……文化は文化領域内で生成し衰亡する。したがって文化領域は、文化の発展変貌の単位となる」

(Sauer 1965 : 363—365)

C.O. Sauer の指摘のなかには、あきらかに文化人類学の文化領域説と合流すべき観点があるし、かれ自身、文化人類学の業績を高く評価している。地理学は、C.O. Sauer が踏んだ手続きのように、まず人間の環境条件を分析しようとする。そして、人間を第一級の地理的因子としてみとめる地理学者なら誰でも、C.O. Sauer のように、人間の生活空間としての文化領域をつぎに研究するであろう。伝統的地理学の手法のように分析をおしすすめていけば、自然と文化とが調和一体とはならない問題点に至るはずである。地域は地人相関の構図であるといい、物的充填の空間であるといい、自然と人間との複合体であるというとき、C.O. Sauer が卒直に語った自然領域と文化領域との不一致という事実は、もはや従来の伝統的地理学の地域認識が幻想に等しいことをもの語っている。C.O. Sauer がいうように、地理学は自然領域と文化領域との一致・不一致の問題にこだわっていたからこそ、学説的発展の遅延をまねいてきたのである。この遅れの認識こそ、C.O. Sauer の文化人類学への微細な理解を生んだ。

「方法論的にいって、文化人類学は社会科学のなかでもっとも進んだ科学であり、とりわけ文化人類学のなかでも最高度に発達した方法のひとつは、地理的分布の問題である。S. Geer のエッセイ(『地理学の性質について』)は、文化人類学にたえざる貢献をつづけている方法論のひとつである。文化人類学者のあつかう物質文化の型は、人文地理学の型と同一のものである。文化特性の観察、文化複合や文化領域に文化特性を統合させることは、まったくわれわれ地理学者のすることと似ているか、あるいは似るべきものである。文化になにが起ったのかを診断するものとしての、文化の地域化に関する文化特性の発生・断絶・消滅・起源の文化人類学者の研究は、事実上、発生結果を地理学的に分析する方法なのである」(Sauer 1965 : 351—379)。

文化人類学が、文化の地域化に関して論ずる場合、多くの点で地理学的分析の方法と似ていると Sauer はいう。しかし、そこには M. Sorre がのぞんでいたような両者の間の研究協力が、すでにあったわけではない。文化人類学は文化人類学として独自に地域の問題にとりくんできたのである。その際、文化人類学は、学問の存亡にかかわるような本質論を経由することなしに、自由に地域の問題にとりくむことができた。それもそのはず、文化人類学として分析せねばならなかったのは、人類文化の問題であり、人類文化の地域化の問題は、第一に人類文化をいかにとらえるかの問題があつてのち生じた、副次的な問題にすぎなかったからである。したがって、筆者が唱えるように、文化人類学の研究内容を熟慮し、しかるのち、地理学の研究に眼をやる地理学者なら、つぎのような問題に直面するはずである。ただし、つぎのような解釈が、地理学にとっては画期的なことであるにもかかわらず、文化人類学にとっては、すでにいふるされたものであることは、C.O. Sauer も知っている。

「もしわれわれが、人文地理学は人類の諸活動の地域的分化を問題にするのだ、ということに同意するなら、われわれは環境論の難局を把握しておく必要がある。環境に対する反応とは、所与の環境の下で所与の集団が行為することである。このような行為は、自然の刺激 stimuli によるものではなく、また論理的必要性によるものでもなく、集団のもつ文化のある要求された慣習によるものである。いかなる瞬間にも、集団は行為について、ある選択を行なう。それは集団が学習した態度様式や技術から生ずる。したがって、環境に対する反応は、ある特別な機会に、居住地に関する特別な文化的選択をすること、より以上のものではない。慣習や文化は、発明され要求されてきた態度や好みを内包している。……われわれは [いまや]、環境が文化的評価のタームであり、文化的評価は文化史における価値そのものであることを知るようになったのである」 (Sauer 1965 : 359)。

少なくとも人文地理学の中では、環境と人間(集団)とは、同等の考察の対象なのではない。あきらかに重点は、主体者たる人間の側にある。およそ環境といえども、それは人間が認識した文化の一部のなかにある。人間の文化的評価をうけた環境を、地学的自然と区別する意味で《風土》と称してもよい。この風土こそは、たとえその自然法則が同等であっても、春夏秋冬の季節感と同様、各民族の文化においてことなり、生活者の認識においてことなるものである。このような認識に到達すれば、地理学にとって分析すべき主目標は、文化の内面そのものということになるはずである。

「生活方式 way of living をともなった共同体としての文化領域は、歴史的=地理的表現という独特な“土壌”あるいは家庭に育ったものである。その生活方式=経済 Wirtschaft は、それがもつめる満足を極限にまで増大し、それがひろげる努力を極限にまで縮小する方式である。そのときの知識により、集団は適当な、あるいは十分な位置の利用を行なう。しかしながら、これらの欲求や努力は、労働組合が行なうような金融やエネルギー料金に対する思案を必要とはしない。……あらゆる人間的景観、あらゆる居住様式は、どの瞬間においても実質的経験の蓄積であり、Pareto が“残り物” residues といって好んだものの蓄積である。ものごとの起源について、地理学者は自分自身、問いつめることなしに、家や町、野や工場がどこに、なぜあるのかを研究することはできない。地理学は、文化が機能することを知ることなしに、集団が共住するようになったプロセスを知ることなしに、諸活動の地域化について研究することはできない。しかも歴史的再構成によることをぬきにして、これを行なうことはできない。土地から生活資材を獲得すること、および生活の様式は、ひとびと自身がみずから発見した特性、他の文化集団から得た特性の双方の文化特性に対する知識を内包している。……それらのすべてを含んだ対象とは、文化の空間分化である。人間を問題とし、分析上発生を問題とする以上、時間の連続にその課題は、必然的にかかわっている」 (Sauer 1965 : 351—379)。

かれは決して、A. Hettner のように、時間科学に対する空間科学としての地理学、という位置づけをしない。R. Hartshorne のように、歴史に関心を示しても、時間と空間とをおなじに扱うことを拒んではいない。C.O. Sauer は、文化の空間的分化の問題を、時間的に把握しようとする。それは同時に、空間形成を行なう主体の経験の蓄積過程の分析でもある。それが文化の形成である。文化によって環境が解釈されるとき、環境は文化の評価によって価値をうる。文化地理学にとって、それは木内信蔵のいう「価値的自然」（1967：2）である。人間は、その価値的自然を、価値にしたがって利用する。その利用の方法は、土地を占拠する文化集団が何であるかによってことなる。しかも、文化集団が形成されていく歴史的变化のなかで、価値のちがいが生ずる。その歴史的变化を起こす要因、環境と文化との対応に一番の基礎となるのが生活方式＝経済である。こうして、C.O. Sauer の理論のなかでは、時間と空間が文化領域という場をえて融即するのである。

C.O. Sauer は、文化領域を文化史の枠組とする。ここにも多系的な時間系列の議論がみとめられる。以上のような議論のなかから、かれの唱える文化地理学の構想がうかびあがってくる。

「文化地理学は、地理学の一般的な対象を統合するプログラムを意味する。すなわち、地球の地域的な差違に関する理解である。その方法は、……とりわけ歴史的である。しかもそれは、ある領域内におこった文化の連続を決定する因子を調べることである。くわえてそれは、歴史地理学と経済地理学とをひとつの課題のなかで結合させる。それは、初期の文化領域からつづいている現代の文化領域にまでかかわるものである。それは、その領域の構造における根本的な方法論上の課題をみいだす。文化地理学のおもな課題は、われわれが文化領域として、いささか曖昧に認識してきた地理的集合体の組織や、その意味を発見すること、文化領域の発展における正規の連続的階梯が何であるかについて、認識をより深めること、終焉的退廃的局面をともなった文化自身に関すること、そして、その結果、文化の関係や文化の位置するところにある資源との関係に対する、より正確な知識をうることにある」（Sauer 1962：32—34）。

いままでの文化地理学といえば、文化のなかのひとつの要素を抽出して、その分布状態をのべ、それで地理学の名を冠するような“一見地理学”が多かった。今後の文化地理学的研究は、少なくとも文化の全面にわたって分析をおしすすめ、まずその構造を理解し、文化の地域的ひろがりから、文化の生成・発展・消滅にいたるプロセスを理解しておかなくてはならない。

ただし、C.O. Sauer の議論も、技術や経済を文化の基礎にすえた文化的唯物論の傾向をいくものであり、それは文化理論のひとつの傾向にすぎないことは、あらかじめ理解しておく必要がある。くわえて文化領域説をひろく文化人類学的業績までふくめて考えてみるならば、第一にその閉鎖的な観点において、第二にその歴史的な單元において、第三にその生態学的な観点において、かならずしも事実はそのようなものではないことを、あらかじめ認識しておく必要がある。

その他、この種の議論に対する疑問は、つぎにのべるような J.H. Steward の観点への疑問とともに、文化地理学の今後の課題ともなるであろう。

さて、このような文化地理学の研究は、「近年、アメリカを中心として地理学の重要な研究部門として発展してきた」（別技篤彦 1967：7—12）わけであるが、スタッフが少ないこと、研究の歴史が浅いことなどから、具体的で明確な概念を与える専門書がなかったといわれる。P.L. Wagner & M.W. Mikesell の編集になる“Readings in Cultural Geography”が1962年にアメリカで世に出たことは、「文化地理学の領域における最初の編著」（別技篤彦 1967：7—12）であったという。その論集の巻頭論文として C.O. Sauer の研究が載せられていたことは、意義深いものがある。しかし、この論集に対する評価には、論集を通観して、その定義がまちまちであることや、文化現象の地理学的解釈にすぎない、などのことがあげられ（長谷川典夫 1964：40—41）るのであるが、にもかかわらず、ようやくにして第一級の地理的因子から、地理的世界を形成する主体としての“人間”が、文化地理学によって評価されてきたことに、筆者は重要な意義をみいだすのである。

ここで本章の議論を若干要約しておきたい。F. Ratzel や P.V. Blache の研究は、現代地理学を創始する画期的な研究であったと同時に、その内容のなかには、人類や民族のもつ文化の性質について解明する文化地理学的な視点をもったものであった。F. Ratzel は、それを生命運動論の立場から、P.V. Blache は、それを生態史的観点からとらえていた。なかでも P.V. Blache の生活様式論は、文化地理学の分析課題ともいべき文化の理論に共通する内容を保持し、それが Blache 学派の学者たちによって修正発展されたのである。なかでも修正発展に多大な貢献をなしたのが、M. Sorre であった。

M. Sorre は、同時に社会学との接点を歩む学者であった。かれが展開したのは、É. Durkheim の社会的基体の概念を応用した地理学本質論であった。これによって地理学は、いっそう法則定立的立脚点を得るに至ったのである。しかし、M. Sorre の議論は、É. Durkheim の社会的基体論のさげえざる欠陥をも内包していた。M. Sorre のもとめたものは、社会を可視化した部分にすぎず、社会の不可視的部分にたちいろうとはしなかった。M. Sorre にいたってもなお地理学は非本質的な社会現象の断片を拾いあつめる方法論しかもちあわせてはいなかったのである。

ドイツには、F. Ratzel の運動論を改変し、O. Schlüter の歴史的文化景観論を発展させ、しかもなお、アメリカの文化人類学の議論を吸収した C.O. Sauer がいた。かれはいままでの文化景観論の枠をこえて、文化の不可視的實在にまで分析の手をのぼし、文化領域説をひとつの基礎にすえて、文化の時間的＝空間的研究を地理学にもたらした。ここに、文化人類学と提携した文化地理学の内容が定められ、今後の文化地理学的研究を、重要な研究のひとつとする地歩が築かれたのである。

C.O. Sauer がみちびき示した文化の時間＝空間的研究、文化と環境の研究は、アメリカ文化

人類学における地理学的研究であった。さて、ここに至ってそれを J.H. Steward の文化生態学においてみるのが許されるであろう。

IV. Julian H. Steward の文化生態学

J.H. Steward は、文化生態学提唱の意義に関して、従来の生物学的アナロジーのもとになりたっていた諸研究を排し、文化の問題から環境と人間社会の問題を考えようとする。

「人間社会は、生物学的次元では説明することはできない。人類の進化に、文化の果たした役割は大きく、また文化の発展過程も、生物学的には説明できない特色をもつ。したがって、文化生態学は人間社会と人間のもつ文化の環境への適応を、文化およびそのプロセスにおいて説明する」(1955:31)。

このようにかれが主張するとき、かれは、M. Bates らの生物学的な人間生態学や、R.E. Park, E.W. Burgess らのおこなったシカゴ派の社会生態学の方法論を批判しているばかりではなく、また暗黙のうちに、地理学における疑似生物学的なアプローチをも批判しているのである。Steward にしたがえば、人間は生態学的場面に立ちいるとき、形質的特性によって他の有機体との関係をもつような有機体としての存在のみならず、人間の全生活網に影響を与え、またその全生活網に影響を与えられる文化の“超有機体的ファクター”を導入している(1955:31)というのである。Kroeber 以来の文化概念である“超有機体としての文化”という観点にたつて、人間と環境との関係をかれは考えようとする。とってかれは、文化は文化から生ずる、というような公式に満足しているのではない。かれにとって、文化生態学がきわめるべき課題とは、「環境に対する人間社会の適応が、特定の行動様式を要求するものかどうか、あるいは環境への適応が、ありうる行動様式の、ある範囲を許容するかどうかを確かめること」(36)なのである。

それをみきわめるために、かれは文化＝歴史的方法論を用い、さまざまな文化的特徴の起源を、文化と環境との関係を分析することを通じて、発見しようとする。そのための手続きとは、

- 1) 開発技術／生産技術と環境との相関分析
- 2) 特定の技術によって、特定の領域を開発することによってふくまれる行動様式の分析

3) 環境を開発することによって生じた行動様式が、他の文化要素に与える影響を確かめる、という手続きにより分析していくことである(40)。このような分析を通じて、かれは狩猟採集民の文化から文明にまで配列された、あるいは文明における過去から現在までに配列された文化の分析にあてようとする。そしてこのような分析手続きによって、「さまざまな環境におかれたそれぞれの文化が、たえず変化し、技術や生産のアレンジメントをかえることにより、要求される新しい適応をうむ」(37)メカニズムをみようとする。

このような分析手続きをとるかれの主要な関心は、文化核 culture core を構成する要素の分析にある。文化はこの文化核のもとに空間的＝時間的内容を保持するからである。かれのいう文化

核とは、生存のための活動や経済的アレンジメントにもっとも密接にかかわるものであり、さらに文化核は、それらのアレンジメントと密接に関係づけられるべく経済的に決定されたものとしての社会的・政治的・宗教的諸様式をも内包している。さらに文化核とはそれほど強く結びつけられているものではないが、大きな潜在的変異性を有するその他の無数の特徴、すなわち、類似した文化核をもつ文化どおしの外面上の差違を示すような諸特徴も存在する(37)。

すなわち、J.H. Steward にとって文化とは、環境に適応し、文化をより高度な社会文化的統合に至らせるために必要な生業と経済のアレンジメントが基礎にあり、そのアレンジメントと密接な関係をもった社会的・政治的・宗教的諸様式があり、それらが文化核を構成し、さらに文化の弁別的特徴をささえるその他の要素があって、それらが機能的に関連しあった全体なのである。文化は、このような文化核をもって、文化が占める文化領域を形成する。

しかしながら、J.H. Steward にとって文化領域 culture area という概念は、たんに文化要素の地理的分布の限界を示すものにすぎず、文化核が形成する地域は、文化領域の概念に類似するが、文化領域とは異なる文化型 culture type という独自の概念によってとらえられるものである(87)。文化型は第一に、文化生態学的適応の通文化的規則性によって決定され、第二に社会文化的統合のレベルの類似を示す文化核の特徴からなるものである。したがって文化型は、相互に離接する地域ばかりを示すのではなく、たとえ地域的に隔絶していても、類似した社会文化的統合のレベルをもった諸地域にあらわれるものである(89)。また、ここにいうところの社会文化的統合とは、すべては文化核のメカニズムから織りなされた文化進化の結果である。

文化は、技術や生産設備を改変してゆくことによって、要求された新しい環境への適応をうむ。技術は採集狩猟の社会でも農耕社会・牧畜社会でも、あるいは文明社会でも、ひとしく重要である。技術に付随した道具や、その他の物質文化的要素は、環境への適応条件に応じてひろまり、そのなかで有益なものが選択される。社会文化的統合のメカニズムは、まず所与の環境条件に適応した経済が整備され、そのなかで技術の進歩がおこるとともに、人口支持力が増大し、やがて定住社会が形成され、さらに高度な社会や文化に統合されていくという発展進化の図式のなかにある。文化型は、相互に歴史的に関連のない文化が、ある社会的文化的統合に至ったパラレルな段階を示すわけである。このように、J.H. Steward の《多系的進化論》は、文化型を単位とした各文化の発展過程を示す時間軸である。

synchronic なアプローチには文化型 culture type を、dyachronic なアプローチには多系的進化 multilineal evolution を、そして panchronic なアプローチには文化核 culture core の概念をあてる J.H. Steward の文化生態学的理論は、文化的唯物論からとらえうる文化地理学の最高の目標を示したといえる。わが国においても、この J.H. Steward の理論を応用し、自分のものとなしてきた地理学者たちは、岩田慶治(1965)、佐々木高明(1965)、あるいは川喜田二郎(1967)らをすでに数えあげることができる。筆者も、文化の内面の分析を通じて、文化と環境との関係、文化の時間的=空間的把握をする文化地理学の発展をのぞむひとりである。

が、同時に、J.H. Steward の観点にも問題がないわけではないし、それは、この種の文化地理学を歩む研究者たちの将来に、解決を期待しておかなければならない部分である。以下の疑問点は、A.P. Vayda & R.A. Rappaport (1968 : 485—486) が提示した、かれの文化生態学に対する疑問の一例である。

第一に、Steward が考察した文化特性と生態学的適応との重要な相関関係そのものの存在に、われわれは疑問を抱く。それは Steward が、大部分、相関関係の意義をテストするために考案した、適宜な通文化的資料に参与していないという理由によっている。逆にかれば、自分にとって関心のある特定の文化特性と生態的適応との関係がえられたいくつかの事例を、考察のために選ぶという手続をとっているのである。その手続きは、適応であって文化特性でないのか、文化特性であって適応でないのか、そのいずれかをうるようなその他の事例が、どれくらい多く存在するのかを示してはいない。

第二に、生態学的適応が“原因”であるという結論の基礎が、疑問視される。適応と、ある文化特性との相関関係が、たとえ重要なものだとされたとしても、何が原因で、何が結果であるのか、という評明課題は残されたままである。事実、生態学的な関心を抱く社会学者たちには、時折、特定の生態学的適応の決定要素として、“社会的”ファクターを想定する必要性がいままでにあったはずである。

第三に、たとえ、Steward の相関関係が重要であることが示されたとしても、またたとえ文化特性が従属変数であることが示されたとしても、われわれは、その特性の“必然性”に疑問が依然としてこのころのである。生態学的適応との機能的関係に関するどのような主張も、それらの特性を“必然”とするには、それ自体十分ではない。

J.H. Steward の仮説も、じつはひとつの機能仮説である。閉鎖的な要素連関の公式を用いて他にあてはめるとき、それが規則性や法則をもとめるがための必要十分な合理性に立脚しているかぎり、いたるところで例外事項を生じてくる可能性がある。ようやくにして生物学的モデルを脱脚しえた文化地理学も、今度はあらためて、文化をいかにしてとらえるか、という重要な問題に、再度さしかからねばならないのである。

V. 結語にかえて——認識地理学の可能性——

認識地理学 Cognitive Geography などという新しい地理学のジャンルをここに筆者は用意してみる。これは、C.O. Sauer や J.H. Steward らの文化地理学が、地理学としてのひとつの到達点であるのに対し、また別角度からの文化地理学もありうるのではないかという筆者のひとつの提案である。

ひとびとは、自分たちの生活環境を自分たち独特の分類体系をもって分類し、認識している。ひとびとの、この認知様式、およびそれが文化的に模範とされるような、態度様式に結びつくのであれば、態度様式を分析することによって、認識地理学は、生活者の環境に対する知識内容を知ろうとするものである。それは、C. Frake がいうように、まず「ある話者 [=生活者] の認

識世界 cognitive world を開陳すること」(1962:54)からはじめられる。すなわちたとえば、フィリピン・ミンドロ島の住民、ハヌヌウ族の流儀のなかで、植物やその他の生態学的要素を分類するため、ひとが知らねばならぬ知識を発見することによって、かれらのエコシステムにおいて、かれらがいかに行動するかの決定を下す時点にとりわけ注意をはらいながら、ハヌヌウ族が何を考えているのかを、認識地理学は研究するのである (cf. Frake 1962:55)。さらに、かれらの用語による分類体系がわかったのちは、かれらがカテゴライズしている環境に、かれらがどのような適宜な行動をとるのかを研究する。この研究が、何もハヌヌウ族に限って行なわれるものではないことは、容易に理解できるであろう。

認識地理学の研究は、いわゆる科学的地理学者が、未開民族の地理的知識に対して驚嘆した、つぎのような一節に、平然として答えを出すことのできる一般的な領域にあるからである。

「未開民族でさえ、かれらの居住する地域に対しては相当正確な知識を有するものであり、ことにエスキモーやアメリカン・インディアン、あるいは太平洋諸島の島民のように、狩猟や漁撈のために広い空間を移動する民族にあっては、その居住する地域に対して、しばしば驚嘆に値するほどの正確な地理的知識を有し、かれら固有の地図や海図の発達さえみられる」(織田武雄 1958:7)。

地理学者がすなわち生活者であった古代や、いまあるいわゆる未開社会の地理的知識は、たしかに科学的地理学の内容とは趣きをことにする知識である。しかし、かれら未開民族の《野性的思考》は、《科学的思考》がもとめてやまない“因果律の真理” truth of determinism を認識し、尊重するまえに、ものごとを包括的に感知し、かつそれを演技しているのであって (cf. Lévi-Strauss 1966:11)、《野性的思考》を構成している呪術 magic は、科学のメタフォリカルな表現にすぎず、呪術と科学とは、それぞれ、《認識》の様式にすぎないのである (cf. Lévi-Strauss 1966:13)。さきの地理学者の驚きは、非科学的思考、いな“第一”の科学的思考のきわまりなくひろい認識世界の一片を知ったにすぎない一例である。認識地理学は、科学的地理学が省察することのなかった民間の知識を発掘し、地理学の本郷にたちもどって、ふたたび地理学そのものを再構成しようとする目的をおびたものである。すなわち、認識地理学の目的は、天文学・地理学(地文学)・人文学がひとつに体系だてられた、過去現在および、諸地域にわたる Cosmos の復原にある。

一億五千万キロの彼方に追いやられた太陽を、ふたたび東の地平線から昇らせ、南か北の天界を通過して、西の地平線に沈ませ、オケアヌスに囲まれた人類世界を回復し、五色に色彩られた人類の意味を再考し、人間関係の網の目によって知ることのできる人間的時間を蘇生させること、それらは、生きられた世界へ地理学をもどすことであり、地理学の Geographia への回帰にほかならない。

註

1) 本稿の第Ⅱ章から第Ⅳ章までの内容は、大部分、旧稿『文化地理学の理論構造』(1968, 243頁, 未刊)の第Ⅱ章, 第Ⅴ章, 第Ⅵ章を要約再録したものである。そして, 第Ⅴ章は, 草稿『民間地理学と民間天文学』(1971, 発表用プリント, 未刊)の一部を載せたものである。もともと印刷にする意図のなかったものであり, 論文の体裁に関しては不十分な箇所のあること, あらかじめご了承願う次第である。

2) 生態学講義は, 後藤富男教授が担当されていたものであるが, 三年前, 年度途中において, 教授は逝去され, 急ぎよ筆者が本講義を代講したことによる。以来, 筆者は本講義を『文化生態学』と称し, 講じてきた。

3) 不十分ではあるが, 今日まで, 文化地理学の名を冠した著書を, 筆者は2~3読んだことがある。西亀正夫著『文化地理学の諸問題』(1934)は, 文化の構成要素から, 辻村太郎著『文化地理学』(1942)は, 主として文化誌的観点から, 西岡秀雄著『文化地理学』(1961)は, 未開／文明, Kultur／Culture を分かつた総覧的な精神文化のジャンルから, それぞれ独自の“文化地理学”を展開させてみせている。しかし三者に統一された, 文化地理学の傾向や潮流をみることは困難である。西亀著はあきらかに, 文化人類学のジャンルに近く, 地理学の伝統的な議論を踏まえた内容をあまりみることができない。辻村著は, なるほど当時の地理学的成果を踏まえた内容をもっているが, 当時の自然／人文にわたる現象分類に終わっていて, かえって文化地理学としての個性を出しきれていない。西岡著は, あきらかに文化概念の統一が果されておらず, また内容も不統一で, 地理学としての立場も失なわれがちな内容である。

参考文献

- 青木伸好 1968 「農村地域の構造把握への試み」『人文地理』20—2
- 別枝篤彦 1965 『人間と地域』古今書院
- 1967 「文化地理学の諸問題」『地理』12—2
- BLACHE, P.V. de la 1922 *Principes de Géographie Humaine*, (飯塚浩二 訳 1940 『人文地理学原理』上 岩波書店)
- BOAS, F. 1911 *The Mind of Primitive Man*, New York: The Free Press.
- EVANS-PRITCHARD, E.E. 1961 *Anthropology and History*, Manchester: Manchester Univ. Press.
- FRAKE, C.O. 1962 Cultural Ecology and Ethnography, in *American Anthropologist* 64
- HARTSHORNE, R. 1939 *The Nature of Geography*, (野村正七訳 1960 『地理学方法論』朝倉書店)
- 長谷川典夫 1964 「ワグナー・マイクセル文化地理論集」『東北地理』12—2
- 堀口友一編 1964 『地理学概論』古今書院

- 石田英一郎 1966 『文化人類学序説』 時潮社
- 石田竜次郎 1965 「日本の地理学」『地理』10—1
- 石川栄吉 1965 「民族地理学の系譜と学説」『民族地理』上（今西・姫岡・藤岡・馬淵編） 朝倉書店
 ———— 1967 「原始農耕民族におけるムラと共同体」『文化人類学』（蒲生・大林・村武編） 角川書店 所収
- 岩田慶治 1965 「文化と地域——文化領域説の展望——」『民族地理』上（今西・姫岡・藤岡・馬淵編） 朝倉書店
- 川喜田二郎 1967 「東亜の文化生態学についての方法的反省」『文化人類学』（蒲生・大林・村武編） 角川書店 所収
- 木内信蔵 1967 「地理学の本質と方法」『地理学総論』（木内・西川編） 朝倉書店
- KROEBER, A.L. 1952 *The Nature of Culture*, Chicago: Univ. of Chicago Press.
- 国松久弥 1931 『フリードリッヒ・ラッツェル——その生涯と学説——』 古今書院
- LÉVI-STRAUSS, C. 1966 *The Savage Mind*, Chicago: Univ. of Chicago Press.
- 西亀正夫 1934 『文化地理学の諸問題』 古今書院
- 西川 治 1967 「地域概念と地域学的考察」『地理学総論』（木内・西川編） 朝倉書店
- 西岡秀雄 1961 『文化地理学』 広文社
- 野間三郎 1967 「近代地理学の発達」『地理学総論』（木内・西川編） 朝倉書店
- 野沢秀樹 1967 「最近のフランスにおける地理学研究」『人文地理』19—3
- 織田武雄 1959 『古代地理学史の研究——ギリシア時代——』 柳原書店
- RATZEL, F. 1896—1898 (orig. 1885—1888) *The History of Mankind*, New York: Macmillan.
 (Trans. from *Völkerkunde*, 3 Bde. by A.J. BUTLER)
- 佐々木高明 1965 「アメリカにおける民族地理的研究の発達——文化領域論を中心に——」『民族地理』上（今西・姫岡・藤岡・馬淵編） 朝倉書店
- SAUER, C.O. 1962 Cultural Geography, in WAGNER, P.L. & M.W. MIKESELL eds. *Readings in Cultural Geography*, Chicago: Univ. of Chicago Press.
 ———— 1965 *Land and Life: A Selection from the Writings of Carl Ortwin Sauer*, (ed. by J. LEIGHLY) Berkeley: Univ. of California Press.
- 清水馨八郎 1965 『社会地理学とその実践』
- SORRE, M. 1957 *Rencontres de la Géographie et la Sociologie*, (松田 信訳 1968 『地理学と社会学の接点』 大明堂
- STEWART, J.H. 1955 *Theory of Culture Change: the Methodology of Multilinear Evolution*, Urbana: Univ. of Illinois Press.
- 谷岡武雄 1960 「フランス学派と歴史地理学」『歴史地理学紀要』II
- 辻村太郎 1942 『文化地理学』 岩波書店
- VAYDA, A.P. & R.A. RAPPAPORT 1968 Ecology, Cultural and Noncultural, in J.A. CLIFTON ed. *Introduction to Cultural Anthropology: Essays in the Scope and Methods of the Science of Man*, Boston: Houghton Mifflin.
- 渡辺欣雄 1971 「沖縄の世界観についての一考察——東村字平良を中心として——」『日本民俗学』78

なお本稿はつぎの二書に再録所収，大胡欽一・宮良高弘編 1973 『沖縄の伝統文化』現代のエスプリ72号 至文堂，および，柳川啓一・坪井洋文編 1978 『祭祀研究の再構成』日本祭祀研究集成第2巻 名著出版

山本正三・正井泰夫・田中真吾訳編 1967 『アンドレ・ショレー：地理学の方法論的考察』大明堂（収録論文：CHOLLEY, A. 1946 *Probleme de Structure Agraire et d'Economie Rurale*, dans *Ann. de Géogr.*, LV., 1948 *Geographie et Sociologie*, dans *Cahiers Internationaux de Sociologie*, V., 1950 *Morphologie Structurale et Morphologie Climatique*, dans *Ann. de Géogr.*, LIX., 1951 *La Géographie: Guide de l'Etudiant*, et *Remarques sur Quelques Points de Vue Géographiques*, dans *L'Information Géographique*, 12, No 3~4.)

[昭和53年1月5日改稿擲筆]